

高等学校におけるキャリア教育の現状と課題

－よりよい高大接続をめざして－

北澤正志¹⁾, 橋本美香²⁾, 小崎順子¹⁾

1) 川崎医療福祉大学 総合教育センター

2) 川崎医科大学 語学教室

(平成30年1月6日受理)

The Current Problems and Challenges of Career Education in High School

－ For Better Educational Linkage between High School and University －

Masashi KITAZAWA¹⁾, Mika HASHIMOTO²⁾, Junko KOSAKI¹⁾

1) *Comprehensive Education Center, Kawasaki University of Medical Welfare*

2) *Linguistics Department, Kawasaki Medical School*

(Accepted on January 6, 2018)

抄 録

高等学校では、生徒が培った資質・能力が発揮できるように様々なキャリア教育を行っている。しかし、情報量の不足に加え、大学選択に大きく関わる文系／理系のコース選択が高等学校入学後、半年程度の短期間に行われるため、生徒の適性を引き出す進路指導が十分にはできていないという現状がある。このため、生徒がものの見方を広げ、社会で活躍する自分のイメージをつかめるようにするには、大学および地域社会の協力が欠かせない。

そこで、本稿では、高等学校の進路指導の現状を示し、今後の高等学校の効果的なキャリア教育について検討した。その結果、高大接続の観点から、大学教員の出前講義を効果的に活用することが重要であることが明らかになった。これらの活用により、知識偏重といわれる高等学校の学習を主体的学びへと転換する契機となることも示唆された。さらに、これらを実現させるためには、高等学校に出前講義や大学訪問を実施する際、どのような内容を提供できるのかを明確に示すことのできるホームページの工夫も重要であることを提言した。

キーワード：高大接続, キャリア教育, 進路指導, 出前講義, 主体的学び

Abstract

This study aims to discuss the current problems of career education that most high schools have, and to suggest some possible solutions. Currently high schools promote to enhance career education in order to advance the students' individual qualities and abilities. However, due to a lack of information and time constraints, they have difficulty in providing the students with a wider opportunity to explore their potential aptitudes.

To deal with this problem, it is clear that high school cooperation with universities and the community should be further promoted. Through this cooperation, high schools can facilitate the

students' active learning. Moreover, from the perspective of better educational linkage between high school and university, it is suggested that universities should promote lectures on demand and campus tours for high school students in a more effective manner by providing specific information about such opportunities on their websites.

Key words: educational linkage between high school and university, career education, university entrance guidance, lectures on demand, active learning

1 はじめに

高大接続の重要性が叫ばれて久しく、文部科学省も高大接続を重要視している¹⁾。現在進められている高大接続改革では、大学入学者選抜改革がその柱の一つとなっている。例えば、大学入学者選抜試験を良問とすることで受験生や初等中等教育関係者に大学の教育理念や入学時に求める力を伝えることができるとともに、高校生の学習意欲や教員の指導改善の工夫を最大限に引き出すことができるとされている²⁾。たしかに、入学者選抜が高等学校の学びに与える影響は大きい。しかし、入学者選抜においては、選抜の公平性・定員確保・基礎学力の低下など様々な制約があり、アドミSSIONポリシー等を選抜試験の内容に反映させることは容易ではない。

高等学校では、生徒が培った資質・能力が発揮できるように様々なキャリア教育を行っている。しかし、生きた情報が不足しており、生徒の適性を引き出す進路実現が十分にはできていないのが現状だ。生徒が、ものの見方を広げ、社会で活躍する自分のイメージをつかめるようにするためには、大学および地域社会の協力が欠かせない。そのため、本稿では、高等学校の進路指導の現状を示したうえで、高等学校の学びと主体的な進路選択に大学がどう関わっていくことができるのかを検討する。

2 高等学校の進路指導の現状

2.1 文系／理系のコース選択

2013年にベネッセ教育総合研究所が行った「高大接続に関する調査」によると、文系／理系のコース選択を行っている高等学校では、2年生4月の段階での実施が89.2%である³⁾。大学進学を前提としてカリキュラムを組んでいる普通科のほとんどがこうしたタイプにあたり、文系／理系のコース選択は概ね1年生の9月末までに行っているというのが現状である。なぜなら、高等学校では都道府県教育委員会へ教科書の需要数の報告が義務づけられており、この期限から生徒への指導、保護者確認（説明）、事務処理に要する時間を逆算すると、7月にほぼ決めさせて9～10月にコース選択の最終確認をさせるという指導にならざるを得ないからだ。

文系／理系のコース選択までの指導は、一般的に「自己の適性を知る→職業調べ→学部学科研究→文系／理系の選択」という流れで行われている。例をあげると、ロングホームルームあるいは総合的な学習の時間を用いて業者の自己分析テストを行い、これを参考にしながら自分が就きたい職業に関して調べていく。ある程度職業が絞り込まれたら、それぞれの職業に就くための学部および大学を調べ、受験科目を確認しながら文系か理系かを選択するといった流れになっている。

2.2 早期コース選択の問題点

早い段階で文系／理系のコースを決定するため、様々な問題が生じている。高校生は自己理解が十分にできていない。また、学習内容をよ

く理解しない段階で職業を選び、学部を調べ、文系／理系のコース選択をしている。教員は生徒の学力および適性が把握できていないまま指導にあたることになる。本人の進路希望と保護者の意向の不一致を解消しきれないことも少なくない。

2.1で述べたように、職業選択から考えさせる指導が一般的だが、高校1年生が自分のことを客観的に捉えることは極めて難しく、この段階でイメージできる職業は、保護者の職業や教育関係など自分にとって身近な範囲のものに限られる。生徒の視野は狭く、将来に対する切実感もないため、自分から広く情報を集めて考えようとはしない。職業を調べるというよりは、現在の興味・関心に即して見たいところだけを眺めているというのが現状である。

また、1年生で文系／理系のコース選択を実施するため、それぞれのコースで学ぶ専門科目の学習内容を十分理解したうえで選択することが難しいという問題もある。たとえば「生物」の授業を受けてその内容に触発され、大学でさらに深く学びたいと思い理系を選択する生徒は稀である。専門科目「生物」は、「生物基礎」を履修した後の選択となり、2年生以降での履修となるからである。「日本史」、「地理」、「物理」なども同様で、学校によって教育課程は異なるが、2年生以降で初めて履修することになる科目がかなりある。このように、文系／理系のコース選択によって進路選択がかなり制限されるわけだが、それにしても意思決定までの時間があまりに短い。個人差はあるが、明確な志望を持たないままコース選択を行っている生徒が多くいるのが現状である。

こうした問題を抱えつつ、教員は面談等を通して個々の生徒の進路志望を具体的に把握し、学びへの意欲を引き出すといった指導をしなければならない。教員は、進路選択の指導を行うにあたり、入試に関する情報と学問に関する知

識が必要であり、生徒個々に的確な助言をするためにかなりの努力を要する。ただ、これにも限界がある。一般的に文科系の教員は理科系の学部の知識が乏しく、一方で、理科系の教員は文科系の学部の知識が乏しいのが現状である。生徒の適性を十分に引きだす指導はかなり難しいと言えよう。

3 高等学校のキャリア教育

3.1 教科指導を通してのキャリア教育

今までの高等学校におけるキャリア教育は、いわゆる受験指導が中心になっており、教科指導を通してキャリア教育を行うという視点が欠けていた。大学受験のための知識は学ぶが、それが社会にどう生かされているのか、自己のキャリア形成とどう結びつくのかを考える機会には乏しかった。文部科学省の中央教育審議会による「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では「社会に開かれた教育課程」という言葉がキーワードになっており⁴⁾、社会に出てからこの知識はこう使われるということがよく分かるものに変えていかなければならないとされている⁵⁾。高等学校での知識を大学でどのように発展させ、社会に出てその力をどう生かすのか、こうした展望を抱かせることが「主体的な学び」にもつながると考える。

ただ、高等学校の授業で身につける知識が大学教育のなかでどう深められ、社会でどのように活用されているのかを高等学校の教員が説明するのは難しい。

3.2 探求活動とキャリア教育

キャリア教育においても探求活動の重要性が指摘されている。「高等学校キャリア教育の手引き」では、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成される「基礎的・汎用的能力」を養

成するキャリア教育の必要性が論じられている⁶⁾。このうち「課題対応能力」とは、様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力であり、変化し続ける社会に対応するための学力として求められる。これに連動して、中央教育審議会の生活・総合的な学習の時間ワーキンググループでは2016年6月に、「総合的な学習の時間」を「総合的な探求の時間」に名称変更する案がまとめられた。次期指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（特別活動・総合的な学習の時間）には「自己のキャリア形成の方向性に関連付けながら『見方・考え方』を組み合わせる統合させ、活用しながら、自ら問いを見出し探求することのできる力を育成するようにする」、「実生活や実社会から自ら見出した課題を探求していくことを通して自己のキャリア形成の方向性を見出すことにつなげていく」とあり⁷⁾、名称の変更はこうした意図を明確化するためである。探求的な活動においては、すでに指摘されているように「教科横断的な視点」を持つことが必要である⁸⁾。しかし、高等学校の教員に探求的な活動について研究する時間的な余裕が多くあるとは思えない。また、高等学校に教科横断的な学習を行う体制が整っているとも言いがたい。

4 大学のなすべき役割

4.1 出前講義による教科学習内容の深化

現在の出前講義は、研究内容をわかりやすく伝えようとしているものが多い。これをもう少し高等学校の教科の学習内容を切り口としたものに工夫できないものだろうか。出前講義について、高等学校にどのような講義が望ましいかについてのアンケート結果によると、「教科書にとらわれず、生徒の興味を引くような楽しい講義」、「最先端技術に関連した講義」などが求められているとしている。しかし、西郡¹⁰⁾は「大学に対する新鮮な発見や驚き」が喚起する学習

意欲は一時的なものだとも述べ、「継続型」に向けた取り組みへの転換が求められるとしている。大学の最先端の研究に強い関心を示す生徒もいるが、数は必ずしも多くない。

高等学校での知識を大学でどのように応用し、どのような力を身につけ、社会に出てその力をどのように生かすのか、それらをわかりやすく説明することは大学側に求められる。「高等学校キャリア教育の手引き」でも、高大接続の取り組みのねらい、および活動の効果として「大学の授業レベルを知り、大学での学びと現在の学習とのつながりを認識し、学習意欲の向上を図る」といった項目が挙げられている⁶⁾。知識がどう組み合わせられ、どのように応用されているのかを知ることで、高校生は学問・職業に対する関心が広がり、明確な目的意識を持つことができるようになる。大学側は、社会で活躍できる人材となるために、高等学校ではこのようなことをしっかり学んでほしいと伝えることもできる。

これについて、川崎医科大学附属高等学校では、すでに「Doctor Road」と題した総合的な学習の時間に、川崎医科大学での医師へのインタビュー、大学で学ぶ項目の一部を高校生向けにアレンジした講義、大学の研究室での体験実習を行い、円滑な高大接続を行うための取組を実施している¹¹⁾。附属高等学校以外でも、たとえば、医療系で必要となる物理、生物などの項目を高等学校の段階から少し触れてみることによって、学びがより主体的なものになると考える。

出前講義においては、高等学校の教科内容をふまえたうえで、身につける知識が社会のなかでどう使われるのかを説明する方が導入としてはわかりやすく、高等学校での学習との関連が深くなると言えよう。教科の学習内容そのものと関連のない話では、真の学習意欲にもつながらずとは言えないのではないだろうか。「高等学

校キャリア教育の手引き」でも、各教科がキャリア教育に取り組む意識の必要性について述べている⁶⁾。出前講義でも高等学校での学習内容との関連に留意すべきである。

4.2 探求活動への協力

大学は、探求活動の分野でも高等学校に協力することができる。元来、大学の授業は高等学校の複数科目を総合するものである。すでに、日本学術会議は高等学校に対して、物理・化学・生物・地学という4領域の壁を越えた知識の習得と4領域を関連させた課題解決能力の育成を目指すことを提言している。そのため、4領域を関連付けて指導できる教員の育成も求めている¹²⁾。

しかし、高等学校がこうした体制を作るまでにはかなりの時間を要する。そこで、まずは大学が出前講義として、「総合的な学習の時間」などで事例を示すのが現実的であろう。課題を設定し、情報を収集して検討を重ね、課題を解決していくといった一連の探求活動を大学教員が具体的に示すことによって、高校生は大学においては、科目に特化した従来の高校の学びの限界や、物理・科学・生物・地学の4領域を総合的に学ぶことの必要性を理解し、大学での学びのイメージをより明確に持つことができると考える。

さらに、大学の出前講義による大学教員の協力は、高等学校の教員にとっても探求的学習を指導するうえでの参考となるであろう。このような高等学校と大学の連携によって、よりよい「総合的な学習(探求)の時間」を構築することで、キャリア教育における「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」を育むための基礎ができると考える。

4.3 職業の紹介

大学で学んだことや体験したことが将来仕事

に就いた時どのように生かせるのか、また大学で学んだことが具体的にどのような仕事につながっていくのかを紹介することも望まれる。現場で働く卒業生を同行させることは現実的には難しいだろうが、これが実現できれば説得力が増し、高校生は強い関心を示すに違いない。職業の紹介について、一つの職業に偏るのではなく、複数の職業に関する紹介ができるような構成とすることが考えられる。

たとえば、「医療系の仕事」について、「医師」、「看護」、「診療放射線技師」、「臨床工学技士」、「理学療法士」、「社会福祉士」、「言語聴覚士」、「認定医療デザイナー」、「管理栄養士」など様々な資格があり、職業選択もバリエーションに富んでいることを、大学は示すことができる。そして、それらの違いを明らかにし、それぞれの資格に関する学科の教員を同時に派遣する体制を作ることにより、生徒は職業に関する意識を高めるだけでなく、個々の職種に対する理解を深めることができる。さらに、高等学校もキャリア教育としての企画を立てることが容易となると考える。

4.4 ホームページの工夫

大学の高大接続に関するサイトの出前講義のページを見ると、現在は学科ごとに講義内容を紹介しているものが多い。そのため、高等学校の教員は教科の学習内容との接続がわかりにくく、高等学校が出前講義を企画する際は、学部で何を研究しているのかという見方で探すことになる。だが、先に述べた「高等学校の学習内容(知識)が社会にどう生かされるのか」について、生徒が理解することは重要である。そのため、大学のホームページを、高等学校の立場から見やすいものに変更し、高等学校がアプローチしやすい環境を作ることがまずは重要だろう。

これらを実現するために、高大接続に関する

情報を, 高等学校が求める視点でも公開することが必要となる。この方法として, 以下の①～③を網羅することを提言したい。

①大学で何が学べるのか(研究とは)

②高等学校の教科の学習内容を深めるもの

③学科でとれる資格, および職業紹介

②③のような切り口も必要だ。さらに, 総合的な探求の時間に関するものも②で紹介することが可能である。このように分類しておくことによって, 高等学校は目的に合った講義を検索しやすくなるとともに出前講義の目的が拡大する。また大学側は, 出前講義の目的の指標を具体的に提示することにより, 高校のニーズに対応することが可能となる。

5 まとめ

大学入試改革によって高等学校の学びの質を転換することは重要だが, これは基礎学力の低下・選抜の公平性・高等学校への説明など様々な課題があって, すぐに大きな変更をすることは難しい。一方, 出前講義は高校生のキャリア教育の助けとなると同時に, 大学側も生徒に対して直接メッセージを伝えるよい機会になる。大学と高等学校の良好な関係を構築していく契機ともなるだろう。

今の教育課程と入試制度が大きく変わらない限り, 出前講義や大学訪問の需要時期は1年2学期から2年2学期あたりに限定される。この時期は, 文系/理系のコース選択は決まっているが, まだ明確な志望を持つことができていないという時期に当たり, 出前講座の教育的意義は大きい。また, 2年3学期以降は受験生としての自覚を持たせて学習に取り組ませようとする期間に当たり, 生徒の志望も変わることが少ない。これまでに述べたように, 大学がなすべき役割を明確にしたうえで, 高大接続の一環として出前講義をすることは, 高等学校側だけでなく, 大学側にとっても有効であると考え。

大学での取組を生徒に理解させることにより, 入学後に自分のイメージしていた内容と異なるという理由での進路変更や退学を避けることも可能となる。

今後は人工知能などによって社会がますます急速に変化することが予測される。10～20年後には, なくなっている職業も少なくないとされる。例えば, 医師という職業がなくなっているとは考えられないが, 人工知能に移譲する業務も出てくると考えられる。高校生が, 現在の医師の業務に感じている魅力的な内容とは別のところに, 医師の需要があることも考えられる。これに加えて, 予防医学へのシフトなど, 医療をめぐる社会状況の変化も職業内容の変化の要因となる。前述の「自己の適性を知る→職業調べ→学部学科研究→文系/理系のコース選択」といった指導が限界を迎えていることは間違いない。今後は, 学問に対する興味関心を高めながら自分の強みとする分野を見つけ, それを社会にどのような形で生かしていけるのかを考えさせるキャリア教育に切り替えなければならない。そうすることで時代の変化に対応していく適応力も身につくと考え。

現在, 「思考力・判断力・表現力」に結び着かない暗記による知識偏重の教育が問題視されている。21世紀の知識基盤社会においては, 次期学習指導要領が求める「思考力・判断力・表現力」を基盤とした「生きて働く知識」が欠かせない⁴⁾。そのため, 大学の高大接続の取組は, 高等学校での学びがそうした知識に結びつくよう, 高校生に「生きて働く知識」の重要性を説き, 知的好奇心を刺激し, 主体的な学びへと転換させる一助となることが重要であると考え。

参考文献

- 1) 文部科学省: 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学

- 入学者選抜の一体的改革について（答申）.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf(2017.10.1)
- 2) 大杉住子：新共通テストの概要と課題. 大学入試センター・シンポジウム2017「大学入学者選抜の新展開－新共通テストの課題と個別選抜改革の方向性－」<http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm0001168.pdf&n>(2017.10.15)
- 3) ベネッセ教育総合研究所：高大接続に関する調査.http://berd.benesse.jp/up_images/research/2014_koudai_all.pdf(2017.2.28)
- 4) 文部科学省. 中央教育審議会：次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（第1部）.http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/tousin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_1_11_1.pdf(2017.3.1)
- 5) 市川伸一：次期学習指導要領のポイントは何か？（上），月刊高校教育. 49(11)，5-9，2016
- 6) 文部科学省：高等学校キャリア教育の手引き.http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/tion2011/11/04/1312817_04.pdf(2017.10.15)
- 7) 文部科学省. 中央教育審議会：次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（第2部）（特別活動・総合的な学習の時間）.http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_7.pdf(2017.10.11)
- 8) 天笠茂：カリキュラムマネジメントの本質は？（上），月刊高校教育. 49(9)，5-9，2016
- 9) 堤宏守，徳田尚三：高大連携としての出前講義・実験の実践とその課題. 工学・工業教育研究講演会講演論文集. 606-607，2005
- 10) 西郡大：キャリア教育から見た出前講義の効果と限界－普通科高校のキャリア教育に高大接続活動をどのように位置づけるか－. クオリティー・エデュケーション. 7. 65-79，2015
- 11) 川崎医科大学：2016高大連携の点検と評価.http://www.kawasaki-m.ac.jp/med/etc/document/tenken-hyouka_2016.pdf(2017.10.10)
- 12) 日本学術会議：提言 これからの理科教育のあり方. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t224-1.pdf>(2017.10.25)

